は絶対的のものでないと云われている。我々の症例は何れも Colonna の年令的制約外のものであり、このため成績は劣るものかとも考えられる。然しこれらの手術例よりみて Colonna 手術の年令上限は Colonna の述べる如くであるが、下限には尙考慮の余地がある様である。

骨頭の壊死及び変形性関節症の発生に就いて：—

我々の症例は術後最長 4 ケ月半であり、未だ骨頭の壊死を認めたものはないが、変形性関節症を起すおそれのあるレ線像を認めた。Leveuf によると 2 才以下で円靭帯を切除したものでは 47.8% に骨端炎が起り、切除しなかつたものでは 16.7% であつたと述べ、2 才以下では円靭帯が問題になるとしている。症例 1, 2, 3 は何れも円靭帯を切除しており、今後この点に就いても追求してみたいと考える。

変形性関節症は症例 4 では起る可能性が強い、これには後療法の問題も、大いに関係があるのは勿論である。

結 語

我々は、満 1 年 9 ケ月の 2 例及び 11 才の 1 例に Colonna 手術を、又満 2 年 3 ケ月の 1 例に Leveuf 手術を行つた。Leveuf 手術による例は整復状態は尙不満足であつたが Colonna 手術によるものは良好であつた。然しこれらは何れも尙治療成績と云えぬほど術後期間が短く、且つレ線像で変形性関節症を来す心配があり、単に整復し得たとの医師の満足感を充すのみのものであるか否かは来年の学会の解決に待つ点である。

追 加

岡山大整形 津 下 健 哉

我々も今日まで 20 数例の患者に Colonna 氏手術を試みたが手術が正しく行われたときは術後における股関節の運動は比較的良好に保たれる様である。術後運動のスライドを供覧する。

先天股脱に対する転子下切骨術の批判

九 大 整 形 高 岸 直 人 新 宮 彦 助
吉 井 元 織 田 乾
佐々木 忠 重

Some Comments of Subtrochanteric Osteotomy for Irreducible Congenital Dislocation of the Hip Joint

by

N. Takagishi, H. Singu, H. Yoshii, T. Oda, & T. Sasaki

Department of Orthopedic Surgery, Faculty of Medicine,
Kyūshū University (Direct. ; Prof. T. Amako).

整復不能の先天股脱に対して、姑息的な手段であるが、残された方法の 1 つとして切骨術が行われているが、九大整形外科に於いても昭和 3 年以来昭和 29 年迄 123 例に行われた。内直接検診 36 例 43 関節、間

接検診 31 例 38 関節、計 67 例 81 関節に就き調査

表Ⅱ 手術時年令と直接検診例の成績

年令 判定	5 才 以下	5 ~ 10 才	10 ~ 15 才	15 ~ 20 才	20 才 以 上
秀		2		1	
優		5	3	2	1
良	1	1		1	1
可		3	4		
不 可		3	6	6	3

表Ⅰ 間接検診例の成績

成 績 症 状	正 常	軽 快	不 変		増 悪	不 明
			良不変	悪不変		
疼 痛	2	11	14	2	2	0
跛 行	1	19	0	11	0	0
歩 行 距 離	4	3	15	2	2	5

し得たので、その成績を検討し、2・3の批判を試みたいと思う。

手術時年齢は最少4才6ヶ月、最高36才の間に行われて居り、Camitz, Hass等の手術否適応とした15才未満に46例68.8%に行われている。その成績に就いて先づ間接検診例を述べるに、表Ⅰの如く、悪化したものの僅かに2例、疼痛、跛行、歩行距離に於いて著しく好転していることがわかり、次に述べる直接検診例の悪い成績に比し、良い例は仲々来院しない事が分る。以下直接検診例について述べるが、その成績の判定に当って、自覚症状が術前の状態と比較し、どの程度改良された又は悪化したか或いは術前の状態の儘であるかの点を4段階に分け、◎…手術後改善(1点)、○…手術前後共に良好(0.5点)、△…手術前後共に不良(-0.5点)、×…手術後悪化(-1.0点)を各症例に就き記し、秀…◎及び○のみ、優…◎、○、及び△1ヶ、良…◎、○及び△2ヶ又は×1ヶ、可…総点(+)値なるもの、不可…総点数(-)値なるものの5段階に分け、これに「ト」氏症状、筋力、関節可動性の問題を加え総合判定をした。関節可動性に就いてはFergusonのMotion-indexを利用した。その結果、表Ⅱの如く、秀3、優11、良4、可7、不可18となり約41.8%に術前に比し悪化しているのを見る。この成績はCamitzの外開角自然矯正論、Hassの成長障害論からすると不良と考えられる15才未満に手術例が多いからではないかと考え、手術時年齢との比較を行うに、吾々の結果は寧ろ逆で、10才未満について遙かに良結果を得ていることが分つた。「ト」氏症候が成績を左右する事は論をまたない所であり、事実吾々の調査でもその通りであるが、「ト」氏症候が陰性であるにも拘らず不可例3を始め、優に至る迄疼痛の発現又は非消失があるのは考えさせられる問題である。レ線検査は又本手術の適応の決定、切骨部、切骨角の問題を決定する上に重要である。吾々は特にこの点に調査の重点をおき、可及的正確な前後左右像、患肢起立像、諸富式第1方向第2方向撮影法、断層撮影法及び透視による運動中心点、支持点の決定を行い、股関節周囲の立体的関係の解明に力を注いだ。術式別の判定はSchanz, Froelich型共に大差なく、Bifurkationは1例にのみ判明し、その結果は不良であつた。見掛上の外開角の推移を年齢別、経過別に見るに1例を除いていずれも増加が認められ、年少者に於いてその傾向が強く、増加度も高い様に思えるが20才を越して手術しても尚増加の傾向

がある。この傾向がどの位続くかと言うことは問題であるが、手術時11才2ヶ月の患者で術後7年2ヶ月の間に5°だけ増加した例が、更に9年たつた今日6°増加しているのは興味ある1例である。切骨角(実角)と成績との比較は寧ろ角度の大なるものに良好な例が多く見られたのは意外であつた。切骨部又は小転子を髌臼又は坐骨に支持させるべく前方凸の切骨を行うべしと多くの学者によつて言われて来た。然し調査して見ると前方凸と後方凸との間に大差ないことを知つた。全ての症例に前方凸の手術を行い、どうにかして髌臼内のいつれかの点に小転子を入れ様と努力してきた事に疑問があるのではないかと考えらる。以下吾々の2、3の症例に就いて述べて見たいと思う。症例34()は術後3年を経過した例で右は後方凸で外開角も大きく、左は前方凸で外開角もよく保たれているにも拘らず前者は優で後者は不可となつている。症例28()は切骨術により両側共に「ト」氏症候は陰性化しているが、小転子は髌臼の上方に過ぎ疼痛・疲労共に悪化している。症例12()は術後28年1ヶ月で吾々教室第1例で、神中教授の宿題報告では良として報告されたが現在は100mの歩行すら不能で、骨頭の変形著明、新関節形成あり、かゝる例は他の場合にも同様不可の成績を示していた。亦例3()は髌臼下部に小転子があり、小転子にも変形がなく理想的な接着を示しており、その成績は秀である。症例16()は切骨角(実角)は僅かに後方凸を示すだけであるが術前あつた疼痛消失し、跛行も著しく減少して秀と判定されている。

結 論

- 1) 間接検診例では可成りの好成績をおさめているが、直接検診ではその結果が著しく悪い。
- 2) 手術時年齢は10才未満に於いて良好の成績を示した。
- 3) 「ト」氏症候陰性例に疼痛否消失又は発現例が多く見られた。
- 4) 切骨部前方凸と後方凸との間の成績には大差がない。
- 5) レ線上小転子が髌臼下縁にあるものが最も成績が良い。

追 加 1

鹿大整形 松元 四郎

最近吾が教室で先天性股関節脱臼2例に対して転子

間骨切り術を行い良効なる結果を得たので追加する。

症例は 16 才, 14 才の女子で共に歩行疼痛, 跛行, トレンデレンブルグ氏症候陽性を示して居り, 之に對して転子間骨切り術を行い, いづれも跛行, 疼痛, トレンデレンブルグ陰性となり, 良好なる結果を得た。

追 加 2

飯塚病院整形 松 田 正 次

角度と共に筋力の影響が大きいと思われる。

追 加 3

九大整形 高 岸 直 人

松田先生に対する返事

筋電図についても 2, 3 とつているが, 未だ発表すべき決論を得ていない。筋力は吾々も特に重視しているが不良例では正常例に比し $\frac{1}{2}$ 前後の筋力で, 優又は秀例では筋力は正常に近かつた。

先天股脱関節造影所見と治療成績について

久留米大学医学部整形外科教室
(主任 宮城成圭教授)

助 手 酒 井 久 雄

Arthrograms and Results of Treatment of Congenital Dislocation of the Hip

by

H. Sakai

Department of Orthopedic Surgery,
Kurume University, School of Medicine.

(Direct.; Prof. S. Miyagi)

先天股脱に対する股関節造影法は古くより, 各種造影剤, ガス注入法等を使用し, 多くの人により試みられて居り, 又本法の有用性は, 本病治療に携わる者にとり痛感せられる所である。私は昭和 27 年末より, 31 年 3 月までの間に久留米大学整形外科教室にて入院治療を行つた先天股脱児に対し, スギウロン造影法を試み, その経過を観察したが, 整復前後に於ける造影

像所見より, 治療成績を検討し, 些か知見を得たので報告する。症例は 40 例 54 関節である。

造影に使用する薬剤として, 私は第一製薬製 33% スギウロン溶液を使用した。注入時には先づレ線撮影準備を完了の上, 患児を仰臥位におき, 全麻の下, 局所を 10% 沃度丁幾塗布, アルコール清拭の上, 関節前方より 1.0 乃至 1.5 cc を注入し, 整復前後に 1 枚

表 1 整復前 Limbus 端の高さと治療成績

	高 位	中 位	低 位	不 明	計
良 好	7 (63.3%)	12 (54.4%)	8 (40%)	1	28 (51.8%)
軽ペルテス様変化	0	2 (9.1%)	1 (5%)	0	3 (5.5%)
骨 頭 外 側 移 動	2 (18.8%)	6 (27.3%)	6 (30%)	0	14 (25.8%)
強ペルテス様変化	0	0 (9.1%)	1 (5%)	0	1 (1.9%)
前 捻 傾	2 (18.8%)	2	2 (5%)	0	6 (11.1%)
亞 脱 臼	0	0	1 (5%)	0	1 (1.9%)
再 脱 臼	0	0	1 (5%)	0	1 (1.9%)
計	11	22	20	1	54